

講義録：『道成寺縁起』を読む

古 田 雅 憲

Lecture Notes : Descriptive Study
on the Picture Scrolls “DOJOJI-ENGI”

Furuta Masanori

平成18(2006)年4月に着任して以来、本学人間科学部(児童教育学科)の一年生を主な対象として「国語学概論」と題する講義科目を担当してきた。シラバスにその概要を記して「この講義はさまざまな絵画資料(古い画幅・画帖・屏風絵・絵巻物などから今日の絵本まで)を読み解きながら、絵解きや読み聞かせの場において〈読む・書く〉活動(文字言語)と〈話す・聞く〉活動(音声言語)が相関的に立ち現れる様相を体感しつつ、“国語”と“国語によって紡がれた文化”の多面的なありようを学ぶ」とした。また修学目標を記して「①文字言語と音声言語それぞれの特長および歴史的な変遷や地理的な多様性について自らの言葉で説明する力や、②文章と図像を等しく読み解き、そこから得られた事実に基づいて話したり聞いたり文章を書いたり読んだりする力を身につける」とした。

そのような知見や技能を受講生たちが齊しく備えたかどうか、その実際のところはさておくとしても、文字言語を主たる学習材として学びを培ってきた学生たちにとって——今日みずからも親しむさまざまな“国語の文化”が〈読む・書く〉活動ばかりでなく〈見る〉活動および〈話す・聞く〉活動によってもまた豊かに紡がれてきた——そのようなことを改めて発見する契機になったとするなら実に幸いである。『道成寺縁起』は、そのような講義のなかで取り扱った作品のなかでも受講生たちに好評の一卷だった。小稿はその口述の有様をあらあら記し留めたものである。

今週から二回にわたって『道成寺縁起』(どうじょうじ えんぎ)という絵巻物の世界をご案内したいと思います。15世紀後半あるいは16世紀頃に作られたとされるこの絵巻物は「室町絵巻」とも称される作品の一つですが、その表現は、前回までに取り扱った『信貴山縁起』などの「院政期絵巻」とはずいぶ

ん違った趣きを備えているようです。

教室での口述はこれまでの講義と同様に、スクリーンに拡大投影する図版や口述内容を簡略に記した図表などをごらんいただきながら、また必要に応じてお手許に配付する資料と照らし合わせていただきながら行います。

ごらんいただく図版はすべて、小松茂美氏が編集に携わられた『桑実寺縁起 道成寺縁起』（「続日本の絵巻（24）」中央公論社 1992年）から引用するものです。同書は、やはり小松氏の編になる『続日本絵巻大成〈13〉桑実寺縁起 道成寺縁起』（中央公論社 1982年）の再版書ですが、そちらは残念ながら本学図書館に架蔵しないので、みなさんの閲覧の便宜を図る意から1992年版を用いました。こちらは本学図書館に架蔵していますので必要に応じて手にとってごらんください。以後の口述のなかでは同書のことを「小松氏の本」と略称します。なお教室で図版を提示するにあたって法令等の示す基準に遵っていることを念のため申し添えます。



口述のなかで取り上げる内容全般については、すでに「定説」として広く知られている事柄はもちろんのこと、さまざまな注釈書や研究書や事典等に記されている事柄を参観引用しながら構成しています。先ほど配付した資料の末に〈参考文献リスト〉を掲げていますので、必要の生じた折々にそれぞれご確認ください。

また特に「図像の読み解き」については〈リスト〉内の①～⑥のお仕事を主に参観引用しながら構成しています。お手許の資料をごらんください。

- | |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <p>①小松茂美編『桑実寺縁起 道成寺縁起』（「続日本の絵巻（24）」中央公論社 1992年）</p> <p>②林雅彦「『道成寺縁起絵とき（千年祭本）』」（林雅彦『増補 日本の絵解き—資料と研究』p.96-106 三弥井書店 1984年）</p> <p>※初出：林雅彦「〈翻刻〉絵とき台本『道成寺縁起絵とき（千年祭本）』」（明治大学教養論集（146）明治大学教養論集刊行会 1981年）</p> <p>③林雅彦「『道成寺縁起絵とき手本』」（林雅彦『増補 日本の絵解き—資料と</p> |
|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|

研究』 p.89-95 三弥井書店 1984年)

※初出：林雅彦「資料翻刻『道成寺縁起絵とき手本』(伝承文学研究 (25) 伝承文学研究会 1981年)

- ④林雅彦「『道成寺縁起』のことばと絵画—絵解きを視座にしつつ」(日本の美学 (30) p.51-65「日本の美学」編集委員会 2000年)
- ⑤出岡宏「『道成寺縁起絵解き』をめぐって—〈かたり〉の場についての試論—」(人文科学年報 (44) p.1-23 専修大学人文科学研究所 2014年)
- ⑥尾道市立大学伝承文化研究会「絵巻『道成寺縁起』を読み解く〈安珍清姫伝説を追って〉—平成25年度～27年度研究活動より—」(尾道文学談話会会報 (6) p.83-118 尾道市立大学芸術文化学部日本文学科 2016年)

この教室で行う口述もまた多くの方々のお仕事に支えられているわけですが、これからの話題の一つひとつに関して、それに触れるにあたって参観引用した資料等については、そのたびごとには紹介することができません。「教室で行う口述」の都合から、特に必要のある場合を除いては煩瑣を厭うて止むを得ずそうする旨、どうぞご承知置きください。もちろん「確認したい」とのご要望の生じた折々には遠慮なくお声かけください——すべてこれまでの講義と同様です。



最初に『道成寺縁起』の概要をお話しします。お手許の配付資料をごらんください。スクリーンには要点ばかりを抜き書いた図表を提示します。

——和歌山県日高川町鐘巻(ひだかがわまち かねまき)というところに道成寺という天台宗の古刹(こさつ：古い寺院)があります。熊野山系から流れ下る日高川が作った扇状地のなかの、ちょっと小高い丘の上にあるお寺です。寺伝によれば大宝元(701)年、文武天皇(もんむ てんのう：683～707年)の勅願(ちよくがん：帝の祈願)を承けて紀道成(きの みちなり)という人が建立したとされています。

この絵巻物はその道成寺の“鐘”にまつわる男女の愛憎と法華経による救済を描いたもので、上下二巻(上巻：32×1125[㍉]／下巻：32×1112[㍉])からな

る“絵本”です。作者は未詳ですが、寺伝によれば——真偽のほどはさておくとして、絵を手がけたのは土佐光重（とさ みつしげ：生没年未詳）、詞書（ことばがき）は後小松天皇（ごこまつ てんのう：1377～1433年）の宸筆（しんぴつ：帝の直筆）とされています。国指定の重要文化財です。

天正元（1573）年の暮れ、当時の室町幕府将軍 足利義昭（あしかが よしあき）公がこの絵巻物を拝観して大いに感嘆なさったらしく、奥書に「可為日本無双之縁起」（日本無双の縁起たるべし）として花押（かおう：特別の自筆サイン）を加えるとともに末代までの寺禄を寄附して下さったとあります——そのことからもお分かりいただけるように、この絵巻物は物語としての面白さから身分の上下を問わず人気を集めたようで、今日に至るまでご住職による絵解き説法が伝わっているほどです。



次に物語の梗概です。お手許の資料に掲げていますので、それを通読してみましょう。

醍醐天皇（だいご てんのう）の御世、延長六（928）年の八月ある日のこと。見目うるわしい僧が身なりもそれと整えて、奥州からはるばる熊野神社に向けて参詣の旅に出た。ようよう熊野に至ろうかという日、紀伊国は牟婁郡（むろのこおり）真砂（まさご）あたりで日が暮れて、その夜の宿りを乞うため僧が訪ねたのは清次庄司（きよつぐのしょうじ）という男の家だった。

が、何としたことか、亭主の妻女が僧を見るなり恋をしてしまった。その夜、妻女は自分でもどうしようもない思いに突き動かされるままに僧の部屋に忍び入り、僧の寝床に添い臥して——今宵あなたがお泊まりになったのも前世からの不思議なご縁、ぜひにも…などとかき口説いては一夜の契りを迫ったのだった。

むろん僧が承知するはずもない。寝床から飛び起きて、自身の言葉で熊野参詣の篤志をはっきり伝えて断った。が、それでも女は身を引こうとはしない。そこで僧はとっさに嘘をついた——熊野参詣を無事に果たしたなら、その帰りにならあなたのお気持ちに添いましょう…などと言葉たくみに女をな

だめすかしてその場を切り抜けた。

翌朝、出立する僧を見送った女は、男の言葉がまさかその場のがれの嘘だったとも知らず、その言葉を信じてひたすら待った。が、いつまで経っても戻らない。帰りを楽しみにあれやこれやと仕度したというのに…。

それもそのはず、僧は別の道を通って逃げたのだった。だまされたと知って思い詰めた女はすぐさま後を追いつめた。怒りにまかせて走る、走る、走る…。その姿を見た往来の人々は怖じ恐れるばかり。

やがて五体王子神社の境内で追いついたが、僧は人違いだと喚きながら逃げまどう——女の怒りと憎しみが炎と燃え立つ。その火はやがて女自身の心を焼きさいなみ、とうとう彼女は生きながらに蛇身に堕ちた。

僧は日高川を渡り道成寺に逃げ込んだ。後を追って、全身ついに大蛇と化した女が川を押し渡ってくる。

僧の訴えを最初は信用しなかった道成寺の宗徒たちも、必死の様子を見るうちについに僧を匿うことにした。梵鐘を下ろして僧を中に入れ、これで安心と思いきや、境内に入り込んだ大蛇は間もなく僧の居場所に気がついた——たちどころに鐘に巻きついたかと思うと、数時間もの間、火を吹いて鐘を真っ赤に焼いたのだった。やがて鐘から離れた大蛇は血の涙を流しながら、もと来た方へ帰って行った。あわれ美男の僧もまた、鐘のなかで焼け死んでいた。

ある晩、道成寺の住職がこんな夢を見た——蛇二匹と化した男女が現れて苦界に墜ちた我が身の救済を願うのだ。目覚めた住職はそれに応え、宗徒一統とともに二人の供養を執り行った。やがて法華経の功德によって二人はめでたく救われて、それぞれ天人として転生することができたのだとか。

さても法華経の功德と熊野権現の天佑のありがたさ——皆様よくよく信心なさいます。

【僧の出立①——図版 1】（「小松氏の本」66 頁から引用）

それでは『道成寺縁起』上巻の始まりです。巻頭の長い詞書（第一紙～第三紙）に続いて描かれた最初の場面（第四紙）です。詞書はお手元の資料に掲げ

ていますので後ほどお目通しください。



笈（おい：修行僧が仏具・衣類・食器などを入れて背負う箱）を背負い、手に念珠を持った男が後ろを振り返りつつ歩みを進めています——長頭巾（ながときん）を被った僧衣姿はいかにも行者らしい出で立ちです。

振り返る男の視線の先には、人目を避けるかのように赤い小袖をかずいている（頭から被っている）女——被衣姿（きぬかずきすがた）と言います。口許を片袖で隠して、男に何やら話しかけているようです。上の梗概に言う「翌朝、出立する僧を見送った女は…」の場面です。女には夫がいるのですから口許を隠して声を潜めているのでしょう。

女のかたわらには「かならず待まいらせ候へく候」と書き添えてあります。ざっと現代語訳すると——お帰りをお待ちしますわ、きっとよ…のよう。まるでマンガの“吹き出し”のように女の発した言葉が書かれています。巻頭の長い詞書のなかに「難無参詣遂 宝幣を奉り 下向の時 哪にも仰に随ふ」とありました。ざっと現代語訳すると——まず熊野参詣を無事に果たしたなら…その帰りにならあなたのお気持ちに添いましょう…のよう。女はそういう男の言葉を信じているのでした。

この“吹き出し”のような書き込みのことを「画中詞」（がちゅうし）と言います。『道成寺縁起』には前回までの『信貴山縁起』に比べてずっと多く用いられています——この作品の面白さとして注目しててください。

さて女の言葉を承けて男はまず「争か偽事をは申し候へき」と応えました。ざっと現代語訳すると——ぜったい嘘なんか言いません…のよう。が、そのかたわらに「疾々参候へし」とも書き添えてあります。それを（さっさと逃げださなきゃ…）のように内言として読むなら、その前の言葉はとっさの言い逃れだったに違いありません。この男、口では（ぜったい嘘なんか言いません）などと言いながら、心のなかでは…とするなら、後に女が騙されたと身を震わせるのも致し方ないことかしれません。

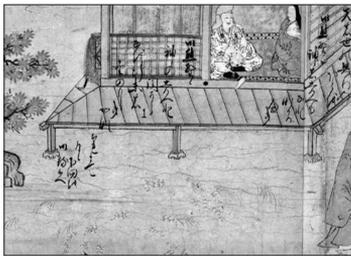


この冒頭の場面はとても印象的です——男がいきなり画面右側に向かって進もうとしているのですから。「空間的逆行」と言ってよいかもしれません。

「絵巻物」という表現形式はふつう左進行です——右から左に向かって時間も空間も進んでいきます。言わば左方にある“未来”に向かって少しずつ巻物を開いていきながら、主人公と一緒に物語の進展を体験するというわけです。そういう“お約束”からすれば、この冒頭の場面は読者の驚きを誘い、物語世界に誘う絶妙の“しかけ”と映ったかもしれません——えっ、これって普通じゃあないよね、いったい何が起こるのかしらん…のように。

そう言えば『信貴山縁起』にも印象的な場面がありました。命蓮さんが操る「剣の護法」が、まるでジェット気流に乗っているみたく帝のもとに駆けつける場面です——画面左上から右下へ…見る人があっと驚く印象的な場面でした。

【前の夜の出来事——図版 2】（「小松氏の本」66-67 頁から引用）



作者の“しかけ”は続きます——「空間的逆行」に留まらず「時間的逆行」を描こうとするのですから。

この場面は前図 1 のすぐ左隣に描かれたものです（第五紙）。絵巻物の“お約束”に従えば時間は進んでいるはずですが、実は前夜の出来事らしくて。

藪（しとみ：格子状に組んだ棧に板を張った戸）を開け放った部屋が見えます。宿の一室のようです。室内に敷かれた畳のうえに男があぐらをかいて座っています。背負ってきた笈を縁に置いて一休み…といった様子——長頭巾は被ったままですし、両脚に巻いた脛巾（はばき：長く歩く際、脚の疲労を軽減したり怪我を予防したりするためのサポーター）もはずしてませんから、どっころしょっと腰掛けるやいなや…というところを表しているようです。

その瞬間、女が忍び入ってきたのです。それほど気が急いでいた…ということでしょうか。男のかたわらに座るやいなや、女は片袖で口許を隠して——周囲をはばかりって声を潜めたのでしょうか、何やら話しかけている様子です。

画中詞によれば男を誘惑している場面ですから表情もそれらしく描かれていたかもしれませんが、残念なことにお顔の様子は見えません。絵の具がすっかり剥落したからです。この時代、きれいな“白”を描くために、白い貝の殻を細かく砕いて絵の具にしました。「胡粉」(ごふん)と言います。描いた当初はキラキラと輝く地肌の上に紅の色がよく映えてとても美しかったと思います。が、貝殻の粉を膠(にかわ)で固めたものですから、いつしかペチッと割れて剥がれてしまったのです。



さて庭先に萩の花が咲いています。ということは秋ですね。なるほどかたわらには真っ赤に色づいた紅葉が描き添えてあります。

こういう“秋草の花”を描き添えるときは、画幅や画帖あるいは屏風絵や絵巻物などの古い日本画では“夜”の場面を表すことが多いようです。月明かりのもと、風にふうわりとたゆたう草の花の風情がまさに秋の情緒を格別に表すものと意識されたのでしょうか。

そう言えば“秋草の花”と“夜”を見事に取り合わせた一例として、与謝野晶子さんの和歌一首を思い出したりもします——もちろん時代はずいぶん下っていますが。お手許の資料をごらんください。歌集『みだれ髪』に収められた一首です。

なにとなく君に待たる、心地して出でし花野の夕月夜かな

——あなたが家の前で私を待っているような気がふとして…外に出てみると、あたり一面に秋草の花が咲き乱れるなか、ぽっかりと浮かぶお月さま…。

いかがです——“秋草の花”と“夜”と取り合わせる伝統的な美意識は、明治の人々をも魅了していたようですね。

それはともかく…この場面もまた「前夜の出来事」でありました。もちろん絵ですから“夜”だからといって画面を暗く塗りつぶすことはできません。その代わりに萩の花を描き添えることで、これが夜の場面だということを表そうとしたわけです。

くり返しますが「絵巻物」という表現形式はふつう“左進行”です——右から左に向かって時間も空間も進んでいきます。言わば左方にある“未来”に向

かって少しずつ巻物を開いていながら、主人公と一緒に物語の展開を体験するというわけですね。そういう“お約束”からすれば、冒頭の場面は「空間的逆行」を、この場面は「時間的逆行」を描いていると言ってよいでしょう。作者は読者の目を喜ばす“しかけ”を重ねて設けているのだと思います。



さてみなさん、これは前夜の出来事です。想像してみてください——薄暗い室内に男と女がいて何やら話しこんでいます。いったいどんな話をしているのでしょうか。彼らの話した内容が画中詞として書き添えられています。

まず女のせりふは——「先の世の契りのほどを御熊野の神のしるへもなとなるへき」と和歌仕立てになっています。ざっと現代語訳すると——私たち二人が結ばれるのは前世からの約束だったのね。熊野神社の神々がきくと導いてくださったんだわ…のよう。ずいぶんな思い込みようです。

それに答える男のせりふは——「御熊野の神のしるへと聞からになを行末のたのもしきかな」とやはり和歌仕立てです。返歌ということですね。これもざっと現代語訳すると——あなたの言うとおりに熊野の神々のお導きあってのことでしょうから、これから二人の将来のことをさらにお願ひして参りましょう…のよう。そうして「これまてにて候 下向を御待候へ」（今宵はこれまで。私が帰ってくるのを待っていてください…）だなんて——後から思えば、その場しのぎに言い逃れを口にしたのが運の尽きでした。

【僧の出立②——図版3】（「小松氏の本」68-69頁から引用）



柳の木の下に女が立っています。赤い小袖の被衣姿で人目を避ける様子です。口許を片袖で隠して何やら男に話しかけています。

この画面は状態が比較的よくて、女の表情をうかがうことができます。その表情をみなさんはどうごらんになりますか。

その女の視線の先には笈を背負った男がいます——長頭巾を被った僧衣姿はいかにも行者らしい出で立ちです。彼の背後には立派な松の木が枝葉をたっぷりと繁らせています。

この場面（第六紙）は上の梗概に言う「翌朝、出立する僧を見送った女は…」を描いたものです——が、それはちょっと変な気がしますね。と言うのも「僧の出立」の場面は冒頭（第四紙）にありましたから重複してしまいます。

もちろんこういう解釈はできなくはありません——最初のは邸前での別れの場面。しかし女は名残惜しくて、そこから村はずれまで男についてきた。そして村境の柳の木（柳の木はそういう境界を示す木でもありました）の下で改めていよいよお別れ、それがこちらの場面です…というように。が、そういう解釈はできるにしても、やはり似たような場面が二つあるのは冗漫には違いありません。このことはもしや『道成寺縁起』が作られた際の何らかの事情とも関わるのかしれませんが、今これ以上のことをお話しするための材料を持ちません。あれやこれやの想像はさておいて、まずは画面を丁寧に進めましょう。

女の背後にある柳の木——その木が境界を示す木として時に“異界への出入り口”を暗示したりもする…となれば、この女がやがて蛇身に墮ちることを知っている私にとっては、なかなか意味深長な表現に見えてもきます。

男の背後にある松の木——その木が冬なお青々とした葉を保つことから“不老長寿や永遠”の象徴であり、また時に“降臨する神の依り代”（よりしろ：神霊が依り憑くもの）として神聖視されたりもする…となれば、この男はこれから熊野神社へ向おうというわけですから、これもまた意味深長な表現に見えてきます。そういう意味で、この場面もまたそれなりによくできた画面であるとは言えそうです。

【疑念——図版4】（「小松氏の本」70-71頁から引用）

女は男の「下向を御待候へ」という言葉を信じて待っていましたが、いつまで経っても男は帰ってきません。もしや…と疑念にとらわれた女は街道筋まで歩みでて、行き交う熊野参詣の人々に男のことを尋ねてみました…という場面です（第七～八紙）。



例によって赤い小袖をかざいた女が右袖で口許を隠しながら、行き交う人々に何やら話しかけている様子です。この絵は状態がよいので、眉を曇らせている女の表情が見てとれますね——男の不実を予感して不安

に押しつぶされそうなのでしょうか。

ここでも彼らの交わした会話が画中詞として書き添えられています。

まず女のせりふは——「なふ 先達の御房に申候 わか男にて候法師 かけご 手箱の候を取て逃て候 若き僧にて候が老僧とつれて候 いか程のひ候ぬらむ」とあります。ざっと現代語訳すると——もしもし、道案内のお坊さまにおうかがいいたします。実は私の夫でもある坊様がかけご手箱を盗んで逃げたんでございますよ。若い僧と老僧の二人連れを装っておりますの。その者たちがどのくらい先まで逃げて行ったか、何かご存じでいらっしやいませんこと…のよう。

——これは嘘です。そもそも「私の夫」ではないですし、「二人連れ」でもありません。それから唐突に出てきた「かけごの手箱」とは何のことでしょう。

とりあえず「かけご」という言葉を調べてみると、「ぴったりの二重底を施した秘密細工の小箱」のことだとしたうえで、そこから転じて「本心を隠していること」とか「下心」などの意味がありました。とするなら…おやおや、この女が眉根を寄せて訴えた「私の夫でもある坊様がかけごの手箱を盗んで逃げた…」との話じたいも何やら嘘くさく聞こえてきませんか。さも困ったようなふりをしていますけれども、これはやっぱり本心を隠した嘘に違いありません——女の話が全部デマカセだということは、実は女自身の言葉がそれと表していたというわけです。まさに「語るに落ちる」とはこのことです。だから「かけご」の意味を知っている人がこのせりふを読めば（またまたウソばかり言って、この女！）などと苦笑する…というところだったのでしょう。

このような画中詞の使い方はとても面白いですね。ただ単に場面の説明とかせりふを書いているだけではなくて、そこに“言葉遊び”を忍び込ませている

ます。物語に述べられた地名からすると、女は男を 60km 以上追いかけたことになります——さて男の運命やいかにいかに。

【男の後を追う——図版 5】（「小松氏の本」 72-73 頁から引用）

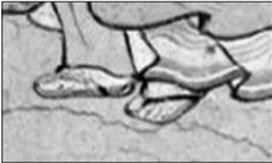


ここから延々 60km 以上にわたる追走劇が始まります——前の場面が続いて、女は街道筋に立って、行き交う参詣の人々に僧のことを尋ねているようです——作者は「袖を口許に当てる」という仕草で「話しかけている」ことを表現するようですね。

それにしてもこの場面（第九～十紙）の女は何やら悲しげな表情をしているようにも見えます——この画面も状態がよいので、絵の具がうっすらと残っていますね。



それから左に掲げた拡大図で女の足許をよく見てください——履いている草履がけばだっているのが分かりますか。



ちなみに一つ前の場面では、左下の拡大図のようにはけばだつてはいません。つまり草履が傷んでけばだつほどに長い距離を歩いてきた——もちろん男の行方を尋ねながら、後を追いつつながら…ということ。こういう細かい表現で「時間の経過や空間の移動」

を表現しています。



画中詞を読んでみましょう。

女のせりふは——「能程の事にこそ恥の事も思はるれ 此法師めを追取ぎ覧かきりは はき物もうせふかたへうせよとて走候」とあります。ざっと現代語訳すると——こんな時に恥ずかしいなんて言ってらんない！あいつを追いつめてやんないうちは、履き物なんかどうだっていいんだから！そう言うやいなや走りだしました…のよう。

この画中詞を読んだ読者はきっと草履に目を向けるでしょう。作者は画中詞を使って読者の視線を草履に誘導しようとしたわけです。やはり「草履がけばだっている」様子を描き込んだのは意識的な筆遣いでした。これを「絵と言葉の共同作業」と言ってもよいでしょう。こういう細かいところにもまた『道成寺縁起』の面白さがあると思います。



ことわざに「かわいさ余って憎さ百倍」と言ったりもしますが、そういうふうに男のことを思いつめている女です。その女から何やら尋ねられたらしく、後ろを振り返っている男性が見えます——長頭巾を被った僧衣姿のその人は、左手に念珠を握っています。いかにも行者らしい姿です。彼もまた先達として熊野参詣におもむく人を“ツアー・コンダクター”よろしく道案内しているのです。右手に畳んだ扇を持っていますね、それを使って名所旧跡のあれこれを指し示したりしたのでしょう。現代のツア・コンさんが持っているらっしゃる“旗”みたく…などと言えはふざけすぎでしょうか。

ちなみに熊野参詣は平安の昔から貴族方の大いに好むところでした。中世に入ってからは大衆化して「蟻の熊野詣で」と言うぐらい大勢の旅人が行き交うようになりましたので“ツア・コン”を生業にする行者さんも大勢いたというわけです。

さて、その男性の視線の先にいる人がどういふ人か、みなさんならもうお分かりでしょう——『信貴山縁起 尼公巻』冒頭に描かれた尼公の様子と似ていますね。はい、市女笠（いちめがさ）に虫垂絹（むしたれのきぬ）とくれば、旅する女性の姿でした。彼女の後ろには行者風の男が馬借（ばしゃく：参詣者の荷物を運んで駄賃を得る）として付き従っています、もっとも馬を使ってはいませんが。この女性、何やら思うところあって熊野参詣に趣いた裕福な都人なのでしょう、たぶん。

ここで再び画中詞を読んでみましょう。

先達の行者が振り返りながら女性に向かって言うせりふは——「女房は御覧し候か あな、恐しや いまた此法師はかゝる人を見候ず、ゝゝゝ」とあります。ざっと現代語訳すると——奥様、ごらんなさいましよ。なんて怖いんで

しょうねえ！アタシや長いことやっていますが、あんな怖そうな女は見たこともござんせんよ、ほんとにもう…のよう。それに対して奥様は何にも答えません——声も出なかったということでしょうか。

【男の後をさらに追う——図版6】（『小松氏の本』74-75頁から引用）



女は男の後をさらに追います。前図5では、赤い小袖を頭からかざして人目を避ける様子でしたが、この場面（第十～十一紙）ではお顔をすっかり晒しています。加えて髪

を振り乱して——当時の女性の様子としては尋常なものではありません。そのうえ着物の裾もはしょって、真っ白なふくらはぎが丸見えです——当時の読者なら（まあ、はしたない…）と眉をひそめるところでしょう。

その足許に注目してください——けばだった草履が片方脱げています。それくらいスピードアップしたということですね。あるいは脱げたことにも気づかないくらい気が急いているのだとも。

ここで画中詞を読んでみましょう。

まず女のせりふは——「あな、口惜や いちとても われ 此法師めを取つめさらん限は心はゆくまじき物を 能程の時こそ恥もなにもかなしけれ うらなしもおもてなしもうせふ方へうせよ」とあります。ざっと現代語訳すると——ああ、ほんとに悔しいわ。一度でいいからあの坊主めをとっ捕まえない限りは気が済まない！こんな時に恥づかしいとか言ってるんない。うらなし（草履のこと）だかおもてなしだか、そんなもの無くなったって構わないわ…のよう。

このせりふのポイントは「うらなしもおもてなしもうせふ方へうせよ」というところですが——「うらなし」というのは「裏打ちしてない一枚作りの草履」のこと。それでは「おもてなし」と言えば…はい、そういうモノはありません。これは「言葉遊び」です。「うらなし」という言葉にひっかけて「おもてなし」という造語を仕立て「どっちにしたってそんなもの、この際、知ったこっ

ちゃんない 裏も表もない、私にあるのは憎しみだけよ！」などと乱暴な口をきいたのです。

このせりふじたいは前図5のそれと似たようなものですが、最初に「あな、口惜や」とありますから、その分、屈辱感や怒りや憎しみがいっそう募っているようです。腹立ちのあまり女がやけくそ気味に物にあたっている…というわけです——当時の読者たちがクスッと笑ったところだったかしれません。



さて、そういう女のあられもない様子を見た往来の人々の反応やいかに。

最初に馬に乗った女性^あがやって来ました——前図5の歩き姿の女性よりもずっとお金持ちそうです。なるほど藺笠（いがさ：藺草の茎で編んだ丈夫で立派な笠）を被り、その周囲に全身を隠せるように長く仕立てた虫垂絹を垂らしています——高貴な女性なのでいっそう周囲の視線を気にしているのです。

女性が乗る馬の口繩をとる侍者は折烏帽子（おりえぼし）を被っていますから、貴人の家に仕える家人^あのようです。たとえば殿の奥様が熊野詣でにお出ましになるから付き従うように…などと命じられたのでしょう。

その家来のせりふは——「こ、なる女房のけしき御覧候へ」とあります。ざっと現代語訳すると——奥様、この女性の様子をご覧なさい…のよう。

彼は人差し指^あで女を指さ^あしています。以前の講義で触れたように、他者^あに対する指さし^あは時に相手に対する詰問や非難を表すことがありました。ということは、家人は女のただならぬ様子に驚き怪しみ、たぶん非難がましい口調で「奥様、この女性の様子をご覧なさい」と言っているのです。

そういう気分が伝わったのか、奥様のせりふも——「誠に、あな、をそろしの気色や」とあります。ざっと現代語訳すると——ホントね、まあ、なんて怖いんでしょう…のよう。藺笠の陰でおずおずと話したのだと思います。

【エキストラの見せ場——図版7】（「小松氏の本」75-77頁から引用）

この場面（第十一～十二紙）には、前図6の馬に乗っていく女性に続いて三人の参詣者たちが描かれています——が、この人々は、どうやら例の女の存在をあまり気にしていないようです。



画面右、市女笠を被った参詣姿の女性が振り返っています。虫垂絹をちょっともたげ、何事かと後ろの様子をうかがっているようです。彼女の視線の先には日焼けした男がいます。折烏帽子を着け、上下とも白い行者服を着ています。背中の籠に寝床らしきものをくるっと丸めていますから、この人も参詣者の一人です——男は左右の手に持った“白くて丸いモノ”を差し出しながら、前に行く女性に何やら声を掛けています。

男のせりふは——「道にてはくるしからぬ物にて候へは ふくたやしなはせ給へ」とあります。ざっと現代語訳すると——旅の恥はかきすても申しますからには“ふくだ”でもお召し上がりになって…のよう。

この“ふくだ”というのは「ふくだみもち（福多味餅）」と言って「大福餅」のことです。男が両手に持って差し出している“白くて丸いモノ”は大福餅でした。おやおや、この男は前に行く女性を口説いていたというわけです。

それに対する女性のせりふは——「人のあひたらんに はつかしきはいかにけにもくるしかるましくは たひもせよかし」とあります。ざっと現代語訳すると——人が見てるから恥ずかしいったらないわ…でもホントに旅の恥はかきすてだって言うんだったら、いただくかしら…のよう。



この場面じたいはとても面白いのですが、あれほど恋しいだの憎いだのと大騒ぎしていた話の本筋を思えば何やら拍子抜けのような気がします——この場面は言わば“エキストラ”による幕間劇みたいなもので、“主役”による本筋はいったんクール・ダウン…ということなかしれません。その場の“温度”をちょっと下げた方が次の場面が盛り上がる…ということでしょうか。

実はこの場面は絵と言葉を両方使った手の込んだ“しかけ”です。

画面の左端に例の女が描かれています。川の浅瀬をザブザブと渡っています。赤い小袖の左袖をまくり上げています——腕まくりして気合いを入れ直し、さらに男の後を追う決意を新たにしている…というところでしょうか。彼

女の黒髪は風に乱れてボサボサになっています。尋常な様子ではありません。

実はこの「髪が乱れてボサボサになる」ことを「(髪が) ふくだむ」と言うのです。となれば、もうお分かりですね。画面の右側では暢気な「ふくだみ(餅)」、それに対して画面の左側では怒りと憎しみに切羽詰まった「(髪)の ふくだみ」——両者が対照的に描かれているというわけです。“言葉遊び”という表現にならって“絵遊び”などと言ってもよいでしょう。「うらなし／おもてなし」の“言葉遊び”を使った前図に続いて、ここでは「ふくだみ(餅)／(髪)の ふくだみ」の“絵遊び”を使って、読者をくすぐっているのです。こういうところもまた『道成寺縁起』の面白さなのだと思います。作者は読者に向けていかに“サービス精神”を発揮しているように見えます。



そういう意味では、川のほとりにしゃがみ込む行者姿の人にも何かしらの含意がありそうなのですが…すみません、今のところそれが分からずにいます。

しゃがみ込んだ彼は右膝を立てて脛巾(はばき)の紐を締め直しているようです。彼のせりふは——「きぬはりはきのにくさは ともすれはくゝりかどけてたまらはこそあらむ」とあります。ざっと現代語訳すると——絹の脛巾は面倒だな。ちょっと歩くたびに結び目が解けて足下に垂れてしまって…のよう。

ちなみに、江戸時代の末から大正時代まで道成寺で実際に行われていた「絵とき説法」のための台本である「道成寺縁起絵とき手本」(昭和51年の書写)——お手元の資料末に掲げた〈参考文献リスト〉の③に翻刻があります——には、また昭和4年に道成寺で行われた「鐘巻千年祭」に関連して新たに作成された「道成寺縁起絵とき(千年祭本)」——同じく②に翻刻があります——にも、この人についての言及はありません。この人が描かれなければならない理由について、みなさん方から面白い読み解きをお聞かせ願えれば幸いです。

【再び男を追う——図版8】(「小松氏の本」76-77頁から引用)

川の浅瀬をザブザブと渡っていく女。赤い小袖の左袖をまくり上げています。

女のせりふは——「あなゝ、口惜や いか、はせむ この身をはこゝにてすてはて、命を思きりめ河 なけきのなみた深ければ うき名をながすとても力な



き事かな」とあります。ざっと現代語訳すると——ああ口惜しい。どうしたらいいのかしら。この切目川（きりめがわ：その川の名）の水面にいつそ身投げでもして、私の命なんか思い切って（掛詞）捨ててもよいのだけれど、こんな川の流れより私の嘆きの涙はもつとずっと深いだからね！その涙の川の流れに乗って私のことが世間の噂になってしまうなら、それはそれで嫌だし…のよう。男のことが恋しいんだか憎いんだか、もはやご自身でも分からないような有様です。痛々しいほどの惑乱を抱えたまま女はさらに走ります。

【あとわずか——図版9】（「小松氏の本」79-80頁から引用）



この場面（第十四～十五紙）は日高川も間近い切目王子神社（きりめおうじんじや）の境内です。

熊野参詣の街道筋には「九十九王子（くじゅうくおうじ）」と言われるほどに多くの社がありました。参詣の人々は一つひとつの社を訪ね、廻々の神々に礼を尽くしながら熊野神社をめざしたので。なかでもこの切目王子神社は「五体王子社」の一つとして数えられるほど霊的な力に満ちた場所とされました。



男が再登場しました——図版3（第六紙）以来です。被り物から衣服・脛巾・草履まで、もちろん背負った笈もまた、すべてまったく同じものですが、今やすっかり様子が違ってきます——両手を広げてばたつかせ、慌てふためいた様子で逃げまどっています。振り返る彼の視線の先はと見れば、ほら、もうそこまで女が迫っているのです。

男を追い求める女は、髪が風になびいて流れるほど速いスピードで疾駆している様子です。その手は男の背中にもう届きそう！

女のせりふは——「や、あの御房に申すへき事あり 見参したるやうに覚候いかに、と、まれ と、まれ」とあります。ざっと現代語訳すると——ねえねえ、そこのお坊様、お話したいことがございますのよ。先日、お目にかかりましたよね ちょっとお待ちなさいませ…のよう。これ以前のせりふで「此法師め」（図版5・図版6）などと悪態をついていたのを思い返せば、ここで今さら「御房」などと丁寧呼びかけているのが何やらかえって怖いですね。

その場しのぎの言い逃れをして女をその気にさせてしまった…身に覚えのある男が震え上がるのも無理はありません。その男のせりふは——「努々さる事覚候はす 人たかへにそかくはうけ給候らん」とあります。ざっと現代語訳すると——そんな覚えはまったくございません！ きっと人違いですって、そんな話を言われたって…のよう。こんなことになるなんて思いもしなかったでしょう。

【ついに追いつく——図版10】（「小松氏の本」80-82頁から引用）



いよいよ男に追いつきました。黒髪をさらになびかせて、お顔も前後に伸びて異様な感じになってきましたね——何やら爬虫類みたくなったような気がしますし、そのうえ口から焔さえ吹き出してもいます。

この場面（第十五～十六紙）の女のポーズは特に印象的です。彼女の右手に注目してください——親指の位置からすると手の甲が見えています。手を返しているのです。もはや自然な走り方ではありません。これは明らかに象徴的な仕草です——延々60kmにもわたる追走劇の完遂を表す“決めポーズ”。ここに男の命運は尽きました。歌舞伎で言うなら見事に“見得”を切ったところ——“付け”の拍子木がパパンと入りそう。

女のせりふは——「己れはとこまで、と、と、と、やるましき物を」とあります。ざっと現代語訳すると——おのれはこの先どこへもいかせないからね！…のよう。まあ「己（おの）れ」とはなんと乱暴な…前図9では「御房」と呼びかけ

ていたのに。

背っていた長頭巾はどこへやら、背負っていた笈や経箱（お経を入れた箱）をかなぐり捨てて、男は両手をばたつかせて逃げまどっています。大事に握っていた数珠も地面にうち捨てられていて、よく見れば緒（お：数珠玉を繋いだ紐）が切れて玉が散らばっています——「玉の緒が切れる」とは「命が絶える」ということの比喩ですから、ついに男の命運も尽きた…ということを暗示しているようにも見えますね。

【蛇身に堕ちる——図版 11】（「小松氏の本」82-83 頁から引用）



次の場面（第十六紙）には女の姿だけが描かれています。その姿は異様そのもの、首から上が大蛇、身体は女のままです。口から焔を噴きだしながら走り続けています。男に対する怒りと憎しみがとうとう自分自身の体を傷つけたということでしょうか。

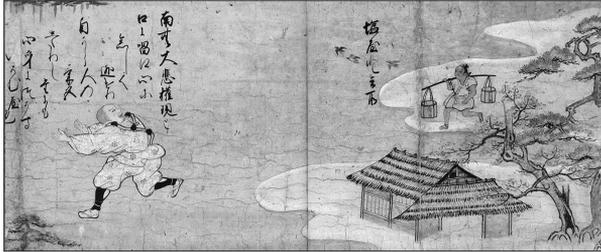
女のせりふは——「先世にいかなる悪業を作て 今生にかゝる縁に報らん 南無観世音 此世も後の世もたすけ給へ」とあります。ざっと現代語訳すると——私は前世でどんな悪事をなしたのだろう、その報いで今、こんな恐ろしい姿に堕ちてしまって…観音さま、この世でも後の世でも助けてくださいまし…のよう。女は救いを求めて悲鳴を上げたのです——こんな姿になって初めて気づいた自分の救われなさ。



女のかたわらに漢文が書き添えられています。これは「法華経」というお経の一節です——「欲知過去因 見其現在果 欲知未来果 見其現在因」とあります。ざっと現代語訳すると——あなたが前世で何をしたかということを知りたければ、今のあなたの姿を見つめなさい。もしあなたが生まれ変わってどうなるかを知りたければ、やはり今のあなたの姿を見つめなさい…のよう。「助けてくださいまし」という悲鳴に対して、このお経の言葉はちょっと冷たいような気がします。が、「救い」というのは甘くない…そういうことなのかもしれません。

怒りと憎しみに支配されてかたくなに閉じていた女の心が、救いを求める哀しみに解かれていきます。これを承けて物語は「救い」を説くのか…と思いきや、さらなる悲劇を描いていくのでした。

【塩屋の景——図版 12】（「小松氏の本」84-85 頁から引用）



女が観音さまに救いを求めているわずかな隙に、男は五体王子神社を抜けて海岸近くにまで落ち延びました。

画中詞に「塩屋と云所」とあります。そこは海水から塩を作っている海人（あま）が多く暮らす場所だったのでしょう。

描かれているのは浜の松原の秋景色です。松に混じって鮮やかな紅葉が見えます。浦の苫屋の向こうの渚には、海水を汲んだ桶を枋（おうご：天秤棒）で運ぶ海人がいます——生成りの布を筒袖（つつそで：たもとのない袖）腰切（こしぎり：たけの短い衣）にした質素かつ実用的な仕事着を着ています。海水を塩竈（しおがま：塩を焼くかまど）にまで運んでいるのでしょう、たぶん。

その浜辺の先に男の走る姿が見えます。後ろを気にして何度も振り返りながら逃げていきます。画中詞はその様子を解いて——「南無大悲権現と口に唱え心に念して逃けり 自から人の気色したりしたにも 心身につかず いはむや蛇となれるを見つ、声を惜ますおめき行」と言います。ざっと現代語訳すると——たまたま人間の様子をしていた時でさえどう接してよいか分からなかったのに、今や蛇になってしまった女の姿を見ながら、男はあたりを憚らず大声で泣きながら逃げていった…のよう。もはや人目を憚る余裕などありません。

【日高川を渡る——図版 13】（「小松氏の本」86-88 頁から引用）

この絵巻でもっとも有名な場面（第十九～二十一紙）です。詞書によれば日高川の渡しの景です。まるまる一紙あまりを使って波のうねりと碎ける波頭が



丁寧な筆遣いと色遣いとを以て描かれています。そこを押し渡っていくのは見事

なほどに美しい大蛇——背筋を貫く鋭い棘の列。全身を覆う大小整った美しい鱗。体幹に添って施された朱と緑青の鮮やかな隈取り。かっと開いた口からは紅蓮の焰を吹き出しています——あたかも内心の憎悪を吐き出すかのよう。両の眼を大きく見開いています——あたかも男の背をにらみつけるかのよう。龍かと見紛うばかり立派な鹿角の生えた大鎌首をもたげ、振り乱した毛髪を風になびかせ、身をくねらせながらザンプザンプと押し渡っていく様子です。

岸に脱ぎ捨てられた赤い小袖は例の女の着物です——この大蛇はあの女に違いありません。図版 11 では上半身だけが蛇身と化した状態でしたが、とうとう全身が蛇と化してしまったのです。

岸に繋がれた舟には船頭と思しい髭面の男がどっかりと腰を据えています。彼は艫を横様に握り、腕組みしてじっと眼前の光景をにらみつけています——どうやら梃子でも動かないという様子。彼のせりふは——「あ、世末になればとて 親りかゝる不思議の事もありけり 目も心も不及」とあります。ざっと現代語訳すると——ああ、世も末となったからだろう、こんな不思議を目の当たりにするなんて思いもしなかった…のよう。先に渡した男から（何があっても例の女を渡さないでくれ）と頼まれたから…でもありますが、その約束がなくても腰がもう抜けてしまって…というところでしょうか。



この図版 13 の後に付された詞書には——「日高川と云かわにて 折節 大水出て 此僧 舟にて渡ぬ ふな渡に云様 かゝる者の 只今追而来るへし 定而 此ふねに乗らんといはむす覧 穴賢々々 のせたまふなといひけり 此僧はいそぎ逃けり あむのここと来て渡せと申けれとも 舟渡わたさす 其ときぬを脱捨て 大毒蛇と成て此河をは渡りにけり 舟渡をはちけしと申て いわうちにありける

と日記には慥に見えたり これを見む人は男も女もねたむ心を振捨て 慈悲之思をなさは仏神の恵あるへし」とあります。お手許の資料をごらんください。

ざっと現代語訳すると——僧は日高川河口の渡し舟に乗り、向こう岸に渡って逃げた。その際「後ろから、かくかくしかじかの女がやってくるはず。きつと舟に乗せよと言うだろう。恐れ多いことだが、どうぞ乗せないでいただきたい」と船頭に頼み置いて先を急いだ。間もなく女がやって来たが、船頭は約束どおり渡さない。すると女はするするっと着物を脱いだかと思うと、ザンプと川に身を投げて大毒蛇になったかと思うと、ザンプザンプと川を押し渡っていったのだった（後略）…のよう。

ここで上巻はおしまいです。みずからの悪心によって蛇身に墜ちた女は、男を追って日高川を越えました。物語の舞台はいよいよ道成寺へと移ります。

【道成寺門前の景①——図版 14】（「小松氏の本」96-97 頁から引用）

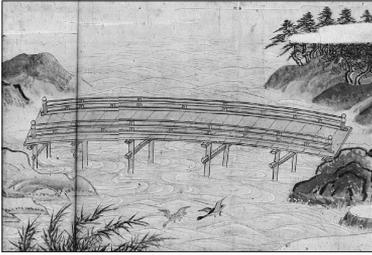


下巻の始まり——巻頭の長い詞書（第一紙～第四紙）冒頭に「日高郡道成寺と云寺は文武天皇之勅願 紀大臣道成公奉行して建立せられ 吾朝の始出現千手千眼大聖観世音菩薩の霊場なり」と創建譚が語られます。お手許の資料をごらんください。それを承けて門

前の景色が描かれます（第五紙）。

街道脇の大岩の陰に鳥居が見えます。朱塗りの部材を立派に組み上げた造りです。ちなみに「明神鳥居」と呼ばれる様式のように、笠木に反りがうかがえますので。あたりには杉、松、楓などが鬱蒼と茂り、立ち込める霞とも相俟って厳かな霊場の空気を醸し出しています。山あいを伝って秋の清浄な風が吹いてくるようです、楓がすっかり紅葉していますから。にぎやかな熊野参詣の人々も、さすがにこのあたりではおしゃべりを控えつつ行き来するのでしょう。そう言えば馬上の人も、傘袋に入れた長柄傘を担ぐ従者も、また杓を担いで行く男も、これ以前に行き会ったエキストラたちとは違ってみな神妙な面もちでいるようにも見えてきます。

【道成寺門前の景②——図版 15】（「小松氏の本」98-99 頁から引用）



擬宝珠で荘厳した立派な橋を渡って道成寺境内に進みます。

ちなみに“橋”はこちら岸とあちら岸とを結ぶ材であるところから、古来“此界と異界”あるいは“浄土と穢土”を区切ると同時に結びつける“特別な場”としてイメージされることがありました。そういうことを思い出すなら、この場面（第六～七紙）の景物もまた「道成寺」という霊場の厳かさを読者に思い起こさせるのでしよう。

見渡すかぎり水面はたいそう穏やかです——図版 13 に描かれた日高川のそれと対照的です。つがいの雁が仲よく岸辺の葦むらに舞い降りようとしています——それもまた男と女の烈しい愛憎劇とは対照的です。

【道成寺の大門——図版 16】（「小松氏の本」100 頁から引用）



日高川を渡った先、小高い丘の上に道成寺はあります。実際、とんとんとと石段を登っていくと、二階建ての立派な楼門を今も見ることができます。もちろんこの場面（第七～八紙）に描かれた楼門は今日のととは違うものですが。描かれた楼門は朱塗りの部材を重層に組み上げ、檜皮で葺いた実に壮麗なもの。左右には武将姿の天王像が据えられています——向かって左にいらっしゃるのが多聞天。右手に鉦を構え、左手に宝塔を捧げ持っています。また右にいらっしゃるの持国天。立派な宝剣を撫しています。お二人そろって寺外をキッとにらみつけ、邪悪なモノはいっさい通さぬ…との神意をお示しです。

楼門に続く築地堀（ついじべい）もまた堅固にしつらえてあって、蟻の抜けでる隙間もない…とはこのことでしょう。僧はほうほうの体でこの聖なる結界の内に逃げ込んだのでした。

【助けを乞う——図版 17】（「小松氏の本」101-104 頁から引用）



道成寺に逃げ込んだ男が道成寺宗徒の前にひざまずいています。巻頭の長い詞

書（第一紙～第四紙）のなかに「件僧 此寺に参 事の子細を大衆に歎けれは」とあります——「かくかくしかじか…助けてください」などと一生懸命に頼み込んでいる場面（第九～十紙）です。

その様子を見た僧侶①（画面右端）は、手に持った扇で男のことを指さしています——図版6のところでは触れましたが、時に詰問や非難の意志を表したりもする仕草でした。彼のせりふは——「なにとさへける事そ 誠しからぬ事かな」とあります。ざっと現代語訳すると——何を騒いでいることやら。真のこととも思えぬわい…のよう。男の様子を冷やかに見ているようです。

後ろの方に立っている稚児（ちご：剃髪していない少年僧）は、蛭巻（ひるまき：柄の部分を通長い金属板でらせん状に巻いた装飾）の大長刀（おおなぎなた）を握りしめたまま、何やら困ったような表情を浮かべています。彼のせりふは——「た、おけ きりなくて見せむ もの、しく」とあります。ざっと現代語訳すると——放っておこうよ 大仰に振る舞っているんだよ 大げさだよ…とすげない言いよう。稚児の前に立つ僧侶②も指さしをしていますので、同じような気持ちなのでしょう。

助けを乞うている男は宗徒たちの前にひざまずいて「いかてか空事を申入候へき」と言っています。その画中詞をざっと現代語訳すると——どうして嘘を申しましようか!…のよう。必死で信じてもらおうとしているのです。

僧侶③（画面左から四人目）のせりふは——「大唐はそも知らず 我朝に取てはいたく其例ありともきかす 言語なき事かな」とあります。ざっと現代語訳すると——広大な唐の国ならいざ知らず、わが国でそういう例があるとは聞いたこともない…のよう。ですがそう言う彼の僧衣の胸元を見ると、しっかり

鎧を着こんでいます——聞いたこともないとは言いながら、助けを乞う男の必死さを見て、もしや…と備えているわけです。

僧侶④（画面左から三人目）のせりふは——「その事に候 いくたの森に身を捨てし女も しにてこそ鬼とはなりけるとはき、候へ」とあります。ざっと現代語訳すると——そのこととございますよ、生田の森でみずから命を絶った女が死んだあと鬼になったと聞いたことがありますぞ…のよう。彼は僧衣の下に鎧を着こんだうえ、右手には大長刀を持ち、左手には軍扇を広げています——必死で救いを求める男の話を真に受けているようです。

ようよう宗徒一同は目の前の男を助けるべく行動を始めたのでした。僧侶⑤（画面左から二人目）のせりふは——「其鐘を御堂の内へ入よ 戸をたつへし」とあります。鐘のある方を扇でさして男を匿う手はずを指示しています。

その言葉を承けた僧侶⑥（画面左端）のせりふは——「かやうの事を各々にはとくいはて かねひきかつきてあやまちすな」とあります。ざっと現代語訳すると——この仰せを皆々に早く伝えねば。皆の衆、鐘を担ぐ折には気をつけておくれ…のよう。大口あけて何やら叫びながら僧侶⑥の指し示す方へ小走りしていく様子です。その視線の先には鐘を持ち上げようとする屈強の三人組がいました——次の図版 18 になります。

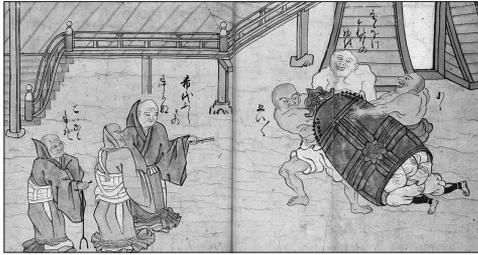


改めて巻頭の長い詞書を読むと——「件僧 此寺に参 事の子細を大衆に歎ければ 衆徒 愍を垂て大鐘を下して僧を中に籠 御堂を立けり」とあります。お手許の資料をごらんください。ざっと現代語訳すると——その僧がこの寺に逃げてきて、事情を泣きながら訴えたところ、宗徒一同は心から同情し、寺の大鐘を下ろして僧を中に匿い、鐘ごとお堂の中に入れてたうえ、すべての戸を立て込めた…のよう。ここでは「即断即決 一致団結」の話になっていますが、絵の方では賛否両論のドラマが描かれていて、いっそうリアルで面白いと思います。

【鐘のなかに匿う——図版 18】（「小松氏の本」104-105 頁から引用）

前図 17 に連続する場面（第十～十一紙）です。

相談の結果、道成寺の宗徒たちは哀れな男をこのまま見捨てるわけにもいく



まいと、下ろした大鐘のなかに彼を匿うことにしたのです。

両肌脱ぎ（もろはだぬぎ：両肩を出す服の脱ぎ方）の三人組が大鐘を懸命に動かして、なかに男を招き入れようとしています。

書き添えられた画中詞によると、三人はそれぞれ「あゝ」「えいゝゝ」と勇ましいかけ声を発したり、「たたおけ これほとのを」（手を出すな、これぐらいワシひとりで…）と大口を叩いたりしています。三人が傾ける鐘のなかに隠れようとしている男の下半身が見えています。

画面左にはその様子を見守っている三人の僧がいます。

鐘を持ち上げようとする三人組を手にした扇で指さしながら見ている僧は「希代ふしきの事かな」と半信半疑の様子。例の指さしポーズをしていますから今なお冷やかな気持ちを抱いているのかしれません。

画面左端の僧は「とはなに事そ」などと状況が掴めていない様子です。鹿杖（かぜづえ：持ち手がT字型だったり、先が二またになったりしている杖）を突いているところからすると高齢の僧です。境内の騒ぎにようやく気づいて遅ればせながら表に出てはみたものの、そもそも何事が起きているのか分かっていないということでしょう。

こういう人々が描かれているところが面白いですね——これもまた詞書にはいっさい触れられない“リアル”です。

【僧の居場所を捜す——図版 19】（「小松氏の本」105-106 頁から引用）



大蛇と化した女がいよいよ道成寺境内に押し入って来ました。男が鐘の中に隠れているとはまだ知らず、その姿を求めてお堂の前を右往左往している場面（第十二紙）です。

日高川を押し渡った時よりもなお両の眼をかつと見開いて、あちらこちらを振り返りつ

つ男の居場所を探しています。口からは焔とともに真っ赤な舌をひろめかし、まるで男を丸ごと呑み込んでしまおうとするかのよう。

二天王像に守られた楼門の結界を突破してきたのです——なんという執心の烈しさ。五体王子神社では観音さまに救いを求めていたはずですが、もはや人の心をすっかり見失ったということでしょうか。この場面に画中詞は書き添えられていません——その内心は「推して知るべし」ということなのでしょう。

【鐘を焼く——図版 20】（「小松氏の本」107 頁から引用）



この場面（第十三紙）が物語のクライマックスです。ここにも画中詞はありません。往時の絵とき説法の場であれば、詰めかけた善男善女は、声を自在に操るご住職の語りに耳を澄ましながら、ただただ息を呑んで画面を見つめたことでしょうか。言葉のリズムや間や響きや声の高低大小明暗などを上手に使い分けながら、歴代のご住職たちは物語のクライマックスを見事に朗唱なさったのだと思います。

試みにその「朗唱」を疑似体験してみましょうか。みなさんの手許資料に、林雅彦氏が翻刻してくださった「道成寺縁起絵とき（千年祭本）」——資料末に掲げた〈参考文献リスト〉内の②の文献です——から該当部分を抜き出しました。なお学修の必要に応じて、読み仮名や句読点や改行記号等を私に加除しています。

程なく日高川をのりこえましたる大蛇は跡をたづねて追うて参りました、爛々（らんらん）たる眼（まなこ）は鏡の如く、怒りの毒焔（どくえん）を吐き地ひゞき打たせて凄まじき勢で迫つて参りました。（…中略…）流石（さすが）の僧兵達も、恐れ戦き（おののき）一たまりもなく吾先にと逃げ散りまして寺中には人一人もみませなんだ。（間）遂に鐘楼を叩き割り中に入つて鐘を巻き龍頭をくわへて、尾を以て叩きます。（シバラク間）鐘もとけよとばかり火焰（かえん）を吹きかける事三時（みとき）あまり、遂に鐘は火

となりました。扱て（さて）、蛇は安珍に恨（うらみ）を報（むくい）、も早や思ひ残す事もなしと、血の涙を流し頭（こうべ）を高く上げて立ち去りましたが、先程の西の入江のあの橋の上より海中深く沈んで相果てました。

まずは微音読してごらんください。ある程度スラッと読めるようになったら、声の大小や高低や緩急、また文や語句の切れ目にある間を意識して、たとえば聞く人をゾッとさせるつもりで読みあってごらんください。みなさんの脳裏にいったいどんな場面が映し出されるでしょうか。

【僧の最期——図版 21】（「小松氏の本」108-110 頁から引用）



三時ばかり
(6時間ほど)
も炎を吐いた
のち、大蛇は
両眼から血の
涙を流しながら

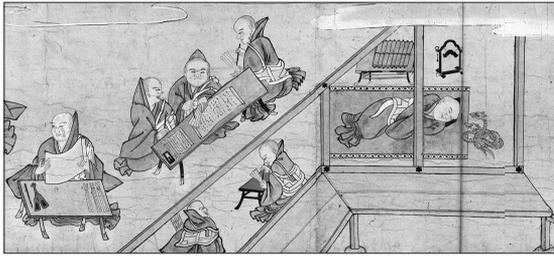
ら境内を去っていきましたが、長い時間にわたって真っ赤に焼かれた鐘はいつまでもくすぶり続け、誰も僧を助け出すことができません。ようやく鐘のなかから僧を救い出したところ、もはやごらんとおりの有様。

巻頭の長い詞書のなかから画面に相当する部分を抜き出すと——「其時 近く寄て見るに火いまた消す 水を懸て鐘を取除て見れば 僧は骸骨計残て墨のことし 目もあてられぬ有様 哀みの涙せきあえす 老若男女 近も遠も 見る人は哀を催さぬはなし」とあります。お手許の資料をごらんください。

男の哀れな最期を前にして、詞書はただ「哀みの涙せきあえす 老若男女 近も遠も見る人は 哀を催さぬはなし」と言うばかりですが、画面の方では、困り顔で手もみする者、懐紙で口許を拭う者、袖で口許を覆う者などが描かれて、僧を見殺しにしてしまった周囲の人々の困惑と悲哀がつぶさに描き出されます。少し離れた所から現場を指さす稚児は、困惑した様子で宗徒や稚児仲間を振り返っています——何と言っているのでしょうか。

もっとも、そういう周囲の混乱の深刻さに比べると、亡くなった人の姿は…失礼ながらちょっと滑稽な感じさえします——この絵の表現は如何なものでしょう…これに関しては「骸骨形（ばかり）残て墨（炭）のごとし 目もあてられぬ有様」という詞書の表現の方がよほど惨劇のイメージを“リアル”に伝えていると思うのですが…何であれ可視化しさえすればよいということでもなさそうです。

【二匹の蛇が夢に現れる——図版 22】（「小松氏の本」110-112 頁から引用）



画面全体が“吹き抜け屋台”（ふきぬけやたい：天上や屋根がないものと仮定して建物を斜め上から見通して描く方法）の構図で描かれてい

ますが、あちこちにデッサンの破綻があって落ち着かない絵です。縁側の向きと柱や梁の長さが合ってませんし、畳が真四角というのも変ですね。横になった僧だけが真上から描かれたみたいですし——これは明らかに下手な絵です。

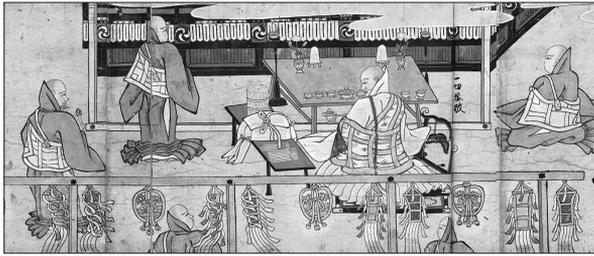
それはともかく、この場面（第十五～十六紙）の有様は、巻頭の長い詞書によると——「其後 日数経て或老僧の夢に見るやう 二の蛇来て 我は鐘にこめられまいらせたりし僧なり 終に悪女のため夫婦となれり 吾 先生の時 妙法を持つといへとも 薫修とし 浅くして います勝利にあつからず 先業限あれは此悪縁にあふ 願は一乗妙法を書供養しまし、ゝて廻向給へ」とのこと。お手許の資料をごらんください。

ざっと現代語訳すると——事件の後、何日か経って、道成寺のある老僧の夢に二匹の蛇が現れて言うには、私はあのとき鐘に匿ってもらった僧のなれの果て。悪女のせいで死んだ後、とうとう夫婦にさせられてしまいました。それというのも私自身の法華経修養が至らなかったせい。願わくは法華経書写によるご供養をたまわりたく…のよう。そう頼んだかと思うと、夢か現かすっと消えてしまったのだとか。

畳に寝ている僧の枕許に絡み合う二匹の蛇が描かれています——夢に現れた男と女のなれの果てです。

その夢告を承けて道成寺の宗徒一同、二人のために法華経千部を写経して法会を執り行うことになりました。僧たちがそれぞれ文机に向かい、筆と料紙を手^にに写経に努めている様子です。いちばん左にいる僧はみなが書き終えた経文を読み改めているのでしょう。

【写経供養の法会——図版 23】（「小松氏の本」112-114 頁から引用）



道成寺住職がさまざまな仏具を並べた経机を前に法会を執り行っています。導師の右には馨架（けいか：読経の際に打ち鳴らす鉦）が見えます。また左には袈裟包みが置いてあります——みな^の写経した法華経千部が収められているのでしょう。

吹き抜け屋台で描かれた本堂内陣の長押（なげし：横柱）には、色とりどりの華鬘（けまん）や幡（はた）が吊り下げられています——折からの微風に吹かれて揺れているようです。また立ち姿の僧三人が撒く蓮の花弁（に見立てた紙片）も風に吹かれてくるくと舞い落ちています——その儀礼を「散華」と言います。たいそう美しい法会の場面（第十七～十八紙）です。

【転生した男女の降臨——図版 24】（「小松氏の本」115-116 頁から引用）



短い詞書に続く場面（第十九紙）です。目をつむって畳に臥す僧が描かれています。そのかわらに、霊雲に乗ったお二人が左上の方からふわりふわりと降りておいでになりました。い

かにも聖なる存在らしいたずまいをしていらっしやいます。前庭に設えられた台（うてな）では折からの微風に笹の葉がゆらゆらと揺れています。天人さまの降臨は登場人物たちの目に現としては見えませんが、笹の葉を揺らす薫風がそれを象徴的に表すのでしょう——お二人の姿は僧の見た夢なのでした。お二人はきれいに結った髪に冠をつけ、おそろいの天衣に身を包み、僧に両手を合わせています。なるほど、先ほどの写経供養で救われた男と女——恋の執心に呑み込まれて蛇身に墜ちた男女の、揃ってめでたく転生した姿ということなのでした。

詞書には——「其後 老僧 夢に見る様 清浄の妙衣着たる二人来て申す 一乗妙法の力によりて忽に蛇道を離れて忉利天にむまれ 僧は都卒天にむまれぬ この事をなしをはりて 各々あひわかれて虚くうにさりぬと見えけり」とあります。お手許の資料をごらんください。

ざっと現代語訳すると——その後、あの老僧の夢に清らかな天衣をまとった二人が来て言うには「法華經の功德のおかげによって私たちは蛇身の苦痛から救われまして、私は忉利天へ、僧は都卒天へとそれぞれ往生いたしました」と礼を述べたかと思えるうちに、それぞれの方へすうっと消えてしまった…のよう。

【法華經を読誦する——図版 25】（「小松氏の本」117-118 頁から引用）



いよいよ最後の場面（第二十～二十一紙）です。花を生けた青磁瓶と青磁香炉を飾った経机の前で、一人の僧が卷子を披いています。画中詞に「声を高くあげてよむ」とあるとおり、声高らかに法

華經を朗誦しているところです。画面左側には師匠と思しい老僧が描かれています——卷子を両手に捧持したまま半眼で瞑想しています。唱えられる經文に聴き入っているのでしょう。画面右側に描かれているのは、もしや師匠の前で朗誦する順番を待っている人でしょうか。

先（第十八紙）の短い詞書に——「一乗妙法の結縁いよ、たのもしくて

人々をこたらすよみけり」とあります。お手許の資料をごらんください。ざっと現代語訳すると——法華経が人と仏さまとを結び繋げる力たるや、それはもう頼もしいものでして。そういうわけで人々は怠ることなく今日もまた法華経を読み上げているのでした…のよう。天台宗では法華経などの朗誦を通じて真理を観想する修養を「法華三昧（ほっけざんまい）」と言うそうですが、これはまさにその真っ最中の様子を描いたものでしょう。

苦界に落ちた男女の魂を救い、静かで穏やかな往生に導いたのが法華経なのでした。物語のラストシーンは、その法華経を大切に読みあわせる人々の姿で閉じられようとしています。



下巻冒頭に置かれた詞書から一文を抜き出して「一卷の終わり」といたしましょう。お手許の資料をごらんください——「且は釈迦如来の出世し給しもひとえに此経の故なれば 万の人に信をとらせむ御方便貴ければ 憚なから書留る物なり 開巻御覧の人々はかならず熊野権現の御恵にあつかるへき物なり また念仏十返 観音名号三十三返申さるへし」

ざっと現代語訳すると——まずはお釈迦様がこの世にお生まれくださったのもひとえに法華経のおかげ。多くの庶民に仏さまへの信心を勧めるきっかけとして実に有り難いものとして、憚りながら拙僧がこの物語を書きとどめたようなわけでございます。この絵巻物を開いて御覧になるみなさんには熊野の神様の恩恵が必ずございましょう。くれぐれも御念仏を十回ばかり、観音さまのお名前を三十三回ほど、どうぞお唱えになってくださいませいな…のよう。



下巻末に記された奥書によると、天正元（1573）年という年の暮れ、当時の室町幕府将軍 足利義昭公がこの絵巻物を拝観なさったのだそうです。その折り大いに感嘆なさったらしく「可為日本無双之縁起」（天下に二つとない素晴らしい絵巻じゃ）と大絶賛なさったのだとか…。お手許の資料をごらんください。

さてみなさんにはいかがでしたか——この絵巻物をひと通りごらんになったわけですから、詞書によるならば近々きっとよいことがあるかもしれません。先週から始めた『道成寺縁起』に関する口述はこれですべておしまいです。